

---

# ジョン・ダン『不意に発生する事態に関する瞑想』

## 試 訳 (V)

湯 浅 信 之

### XX そこで彼等は行動する

消化物を調べて、医者は下剤を用いる

#### 黙 想 XX

評議というものは精神的な活動であって、行動ではない。しかし、行動することが、評議の精神であり、その魂である。評議は必ずしも決定に到らないことがある。このように決まると、常に言えるわけではない。しかし、行動は必ず結果をもたらす。常にこれが実行されたと言えるのである。判事が椅子に座って、法を施行するのを我々が見るとき、法はその尊厳と威厳を示す。戦争の決議に部隊の印璽が押されると、攻撃が始まり、作戦が遂行される。国家に大きな貢献をした人たちを記念するために、ヘルメス柱像と呼ばれた或る種の銅像、すなわち、四角な柱の上に乘せた腕や手のない頭と肩だけの胸像を贈る習慣が昔あった。それは評議を通して国家を支えたことを表したものであった。この手のない絵文字の意味は、たとえ拡大解釈をしても、評議をする者は評議をしている問題に関して、外国から賄賂をもらってはならないから、手がないということであり、また、頭は必ずしも自分の手を用いる必要はない、すなわち、評議に加わった者が必ずしも執行者にならなくても良いということである。しかし、こ

の絵文字、この表象は、頭にとって手は必要ではない、すなわち、評議は行動に移す必要はないということの意味しているのでは決していない。結婚をしても、結婚の結実である子供をつくることに反対であれば、結婚とは呼び難いように、<sup>429</sup> その評議の決定を実行する意志が初めからなければ、評議も評議とは言い難く、単なる空論と言うべきである。学芸や学問は、当然のことながら、頭と最も深い関係にあると言われる。確かに、頭が学芸や学問の座であり軌道である。しかし、論証の学である論理学と、説得の学である修辞学は、手と関係がある。前者は固く閉じた手で、後者は延ばし広げた手で表現されるのが普通である。また、常に、人の力も、神の力も、手で示される。その手にすべてがゆだねられたと言われるのである。神も評議を思い出させる名前よりは、評議の執行を示唆する名前によって我々に示される場合が多い。すなわち、別の意味をもつと思われる他の名称よりは、「万軍の主」と呼ばれることが多いのである。従って、このことから、人間の置かれた危険な状態について、我々は考えてみなくてはなるまい。人間の幸福は、如何なる種類のものであっても、その幸福に貢献する何か一つのも物が欠けると、たちまち壊れてしまうものであり、全てのものが揃って初めて幸福なのである。評議が行われなかったら、私はここまで回復することはできなかつたであろう。しかし、行動と実行が伴わなければ、私はこれ以上健康に近付くことはできない。さて、いま必要な行動とは一体何であろうか。それは下剤をかけること、毒素を抜くこと、自然に暴力を加えること、さらに身体を衰弱させることである。ああ、引き算をすることによって足し算をすることは、自然を犯すことによって自然を回復させることは、衰弱を増すことによって体力を取り戻すとは、何と大きな犠牲であろうか。私はこれまでずっと病気ではなかつたのか。今更「薬で気分が悪くなったか」と聞かれても、それは慰めにもならない質問である。薬は私を病気にするためのものなのか。しかし、これを踏み台にして、その上に立って、我々はさらに人間の不幸の奥を覗き込まなくてはならない。人間の不幸がどんな時に、どんな時期に、襲ってくるのか、この機会を逃さず考えてみなくてはならない。ああ、人間の不幸は、何と悪

---

賢く、何と用心深く、何と勤勉な、何と付き合いのよいものであろうか。不幸は決して一人ではやって来ない。必ず他の不幸を伴ってやって来る。そうして、相互に元気づけ、勇気づけ合うものである。私は既に衰弱し、やつれ果てている。それなのに、下剤を飲んで腹を下し、とことんまで己を空にし、無にしなくてはならないのである。

## 論 議 XX

私の神よ、私の神よ、あなたは秩序の神であるが、野望の神ではない。あなたは全ての人に場所を与えられるが、人が場所を争うことは望まれない。ああ、あなたは何時になったら、宗教的優越性を求めるこれらの論争に終止符を打たれるのであろうか。信仰と懺悔とではどちらが先かとか、信仰と善行ではどちらが先かといった冷酷な論争を、何時になったら人々は止めるのであろうか。頭と手と両方がなければ、完全な生物学的人間とは言えない。評議と行動と両方が揃わなくては、完全な政治的人間とは言えない。信仰と善行の両方があって初めて、完全な宗教的人間が生まれる。しかし、「私は信じます」と言うことは容易だが、それを立証することは難しく、(誰も心を見ることはできず、誰も神の名簿を覗くわけにはいかない)私の心から得た証拠で信仰を明示することはできない。それ故に、ああ、私の神よ、あなたは手に注目するように、行動を観察するように、度々熱心に諭されているのではないか。退屈すぎるほど引き延ばされた評議には、疑いがかけられたり、批難が浴びせられたりすることになる。何時までも評議を重ねていると、多くの好機を失うことにもなる。破れた網を直すことは必要ではあるが、何時までもそれをやっていると怠惰の謗を免れないであろう。「風向きを気にすれば種は蒔けない。雲行きを気にすれば刈り入れはできない」。<sup>490</sup>これは、風向きや雲行きの観察に時間をかけ過ぎて神経質になり、それを自分の怠惰の言い訳としようとする者たちのことである。しかし、このように言ったあなたの賢い忠実な僕は、別の場所では、「手のひらに敷きがあれば貧乏になる。勤勉な人の手は富をも

たらず」<sup>425)</sup>と言っているが、この言葉は全ての人に受け入れられて、注釈などを求める者はいない。全ての悪は手の欠如から生まれ、全ての益は手の存在から生まれる。ああ、私の神よ、私は知っている、(全ての良い知識はあなたから来るから、私はこれを知っていることで、あなたの御名を讃えなければならない) あなたは先ず心に目を留められるが、手をご覧になるまでは目を離されないことを。いや、私の神よ、あなたも我々と同じ処から始められる(少なくとも、我々がそこから始めることを許される)ことを、あなたの霊は示唆しているのではないだろうか。あなたは「どのような人が、主の山に上り、聖所に立つことができるのか」というあなたの質問に自ら答えて、「それは、潔白な手と清い心をもつ人」と言っておられる。<sup>426)</sup> あなたは(少なくとも)我々を先ず手の処に送られるのではないか。あなたの聖霊は、明白な偶像崇拝者たちを直ちに罰するに当って、彼等の手がなすべきこと、彼等が宗教的情熱を表わすために行うべきことを指して、「彼等自身の聖別」と呼んでいる。<sup>427)</sup> 彼等の手が彼等自身と呼ばれているのである。御言葉のなかでは、評議そのものも手という名前で呼ばれている。しかも、あなたは一番良く物の名前の付け方を知っておられる。祭司の評議がダビデを助けた時に、サウルは「祭司の手がダビデと共にある」と言った。<sup>428)</sup> また、モーセが言った後に、他の予言者たちが何度も繰り返したことであるが、評議でもなく、声でもなく、「モーセの手によって」、或るいは、予言者の手によって、主は様々なことについて語り、述べ、命令されたのである。<sup>429)</sup> 我々が身の証を立てる時には、他人だけでなく、自分自身でも、我々の手、我々の行動、我々の仕事に言及することが多い。行動の前には信仰があり、行動の後には忍耐がある。しかし、真ん中の、最も注目すべき、最も際立った、最も目立つ処に行動がある。それならば、ああ、私の神よ、私の祝福に溢れる神よ、精神的な力を獲得することに於て、私はなぜこのように行動が遅いのであろうか。あなたに鞭を当てられなければ、私は反省して自分の状態を考えてみなかった。しかも、これ以上前に進もうとはしないのであろうか。紙に円を書く人は、あと僅かで円が完成するところまで来ていても、コンパスを動かしてしま

えば、再び同じ中心を探して、コンパスの脚をそこに立て直さなければ、円を完成することはできない。同様に、いま私は自己反省をするところまで来たけれども、私の中心であるあなたから離れてしまえば、全てが未完のまま終わってしまう。従って、精神的に行動するということは、あなたの薬、あなたの下剤を飲むということであり、告白によって私の魂を空にすることである。下剤の作用は急激であり、自然に反するものである。しかし、たとえどんなに自然的人間に反するものであっても、私は告白という一服の下剤を避けようとは思わない。薬を正しい方法に従って飲まないのは危険である。<sup>430</sup> ああ、主よ、どうか、私の良心を激しく苦しめる下剤を用いるにあたって、私が正しい方法に従って、赦免を与える力を手に持っている人に向かって告白をすることができるようにして下さい。薬には容易に飲むことができるほど口当りのよいものもあるが、あまり口当りがよすぎるとその効力が失われる。<sup>431</sup> 良心を拷問にかけて苦しめるような告白は必要ではないと私は知っている。しかし、良心の呵責から全て解放されているわけではないことも知っている。この下剤を飲むべきか、すなわち、告白をするべきか、否か、という問題がまだ未解決で、どちらの考えが正しいとも言えないというのであれば、或る偉大な医者の方が参考になるであろう。効果があるかどうか確信の持てないものにも投与するが、害毒を及ぼすことがないと確信できるもの以外は決して投与しない、と彼は正直に述べている。<sup>432</sup> 告白という精神的下剤を用いることは、決して害毒を及ぼすものではない。教会はそれが良い効果を持つのではないかと常に考えて来たし、明らかに多くの謙譲な心を持った人々はその通りであることを体験して来た。従って、私は「救いの杯を上げて主の御名を呼びたいと思う。<sup>433</sup> すなわち、以前に此の世の甘い杯をなみなみと満たしたように、今度は悔い改めの苦い杯を飲み干して、その結果、呪いの杯と、それがもたらす取り返しのできない破滅を避けるようにしたい。あなたの祝福された栄光に溢れる御子は、処刑場に行く途中で、彼の苦痛を取り除くために差し出された（当時その地方では死刑囚にそうするのが温情となっていた）安楽の杯を退けて、<sup>434</sup> 薬に死ぬのではなく苦しみながら死ぬことを

選ばれた。それに習って、私もそのような杯のことは考えずに、私の罪の大瓶を忘れることなく、あなたの聖霊が導くままに、いまそれを注ぎ出し、また、あなたの聖なる教会の定めに従って、いつ何処でも注ぎ出したいと思う。

## 祈 禱 XX

ああ、永遠の最も恵み深い神よ、あなたは男と女を合わせ、一つの肉とされたが、それだけでなく、男と女が一つの魂となり、良きにつけ、悪しきにつけ、此の世の様々な出来事において心を合わせて、互いに協力するように望んでおられる。同様に、あなたは私の魂と身体を夫婦のように合わされた。従って、私の魂が私の身体の回復を願い、それをもたらすあなたの恵み深い処置を無駄にせず、同時に精神的な回復をも志すように、私はへりくだった心をもって祈ります。あなたの恵みによって、私は身体に普通に与えられる治療を受けて、私の身体を膨れ上がらせていた有害な体液を取り除くことができた。ああ、主よ、私の身体には川が流れているが、私の魂の中には海がある。しかも、それは大洪水の時のように膨れ上がった、海よりも深い海である。従って、私が罪の洪水から安全に逃れることができるように、あなたは私の中に丘を立てられた。我々が生まれた時に自然が与えてくれた能力も一つの丘であり、我々はそれによって幾つかの罪から逃れることができる。教育も、勉強も、観察も、手本も、それぞれ丘であり、それらによって我々は幾つかの罪から逃れることができる。あなたの教会、あなたの御言葉、あなたの儀式、あなたの掟などもさらに高い丘である。また、昔の罪を恥じ、後悔し、悔い改める心もまた丘である。あなたはこれらの丘の頂きに私を導かれた。しかし、私の罪の大波と洪水はこれらの丘のどれよりも高い。罪に対するこれらの救済手段を与えられた後も、何度も何度も私は罪を繰り返し、罪を重ねた。この洪水を洗い清めてくれる水は何処にあるのであろうか。罪の大海よりも大きな紅海がある。そして、罪の大海がそこを通過してこの紅海に注ぐことのできる小

---

さな泉がある。本当に後悔し、悲しむ心は、私の全ての罪を、この涙を浮かべた目を通して、あなたの御子の傷口に注ぐ。そうすると、私は清められるのである。私の身体が下剤によって清められるよりも、私の魂はさらに清められ、もっと良い、そして、もっと長い生命を与えられるのである。

XXI 彼等を通して、ラザロよ、寝床を捨てよ、  
と言う者に、神は同意される

医者の治療を成功させ、彼等を通して、ラザロを墓から、  
私を寝床から、神は呼び出される

#### 黙 想 XXI

もし、初めに、男が独りのまま残されていたら、彼は墮落しなかったと考えるべきであろうか。たとえ女がいなくても、男は自分で自分を誘惑することができたのではないか。外からの誘惑がなくても、彼が無限の弱点を持ち、無限の罪を犯すことを、いま私はまのあたりで見ているので、昔独りであったとしても、彼が罪を免れたとは思われない。神は人が良くなるためには「独りでいるのは良くない」と考えられた。<sup>455)</sup>しかし、女が悪くなるためには、三人目は必要ないと悪魔は考えた。神とアダムの姿をした人間が独りであった時には不十分であったが、悪魔とイヴの姿をした人間が独りであった時には十分であった。人は自分に逆らう時には、なんと強い巨人であろうか。それなのに、自分の助けを必要とし、また、自分を助けようとする時には、なんと弱い小人であろうか。私は医者が立たせてくれるまでは、自分では立つことができない。いや、医者が教えてくれるまでは、自分では立てるかどうかも分からない。私自身について、私は何も行うことができず、何も知らないのである。一人の人間は、此の世界の、

何と無力な、何と小さな破片であろうか。しかも、その小さな破片の自分であることも難しいのである。人間はあまりにも小さいので、もしもこんなことになれば（それは良くあることだが）、すなわち、もっと不幸になり、もっと苦しみを受けたほうが楽であるような場合でも、自分ではその不幸の不幸な追加ができないのである。圧死刑を受けている者は、重石が増えたほうが楽になる。しかし、自分ではその重石を乗せることができない、人間は独りで罪を犯し、苦しむことはできる。しかし、他の人の助けを借りずに、悔い改め、許されることはできないのである。他の人が立てると言えば、私は立ち上がるのである。しかし、立ち上がれば、それだけ昇進したことになるであろうか。昇進したとしても、その地位に留まることができるであろうか。私は立ち上がったが故に、寝ていた時よりも、大地に倒れ易くなったのである。人間の動きは、何とねじけた、何と不規則なものであろうか。立ち上がることすら、倒れることへ通じる道なのである。何と多くの人が昇進しても、その昇進した地位を満たすことができないことか。どんなに隅っこにある地位でも空白のまま放置されることはない。空白は許されないのである。或る人がその地位を満たすことができなければ、彼が満たしていないという不満がそれを満たす。自然は空白を嫌うものであるから、誰かが満たしていないと想像されると、根も葉もない想像に過ぎないもの、すなわち、噂や声はその空白を満たすのである。そして、直ちに、（単なる想像以外に根拠はなく、誰の想像かも分かっていないのに）、彼はその地位を腐敗で汚している、彼はその地位に相応しくないと吹聴されて、他の人が彼の地位に就こうとするのである。人が出世しても立っておれない理由は、時には、彼がその地位を満たしていないから、或るいは、そう信じられるからである。しかし、時には、彼がその地位を満たし過ぎているから、立っておれない場合もある。あまりにも美德と、正義と、正直を押しつけると、却ってその地位が危うくなり、重圧に屈してしまうことがある。彼の正直は前任者への非難となって、不名誉の汚名を前任者に被せることもあるし、後任者への重圧となって、後任者が前例に従って行動しようとするほど、その地位の評価が下がり、市場価値



---

が不安定になることもある。私は立ち上がる。そして、しっかりと立っているように見える。それなのに、私は回転する。まるで地球は回転しているという新しい原理の新しい証拠になったようである。私はまわりの人達にはじっと立っているように見えるが、立ったまま目が眩むほどぐるぐると回っているのであるから、地球が静止しているように見えても、回転していると信じることはできるはずである。人間に中心があるとすれば、それは不幸である。不幸の処で、不幸の処だけで、人は静止し、何時もそこに我を発見する。少しでも昇進すれば人は必ず動き、目眩いを起こすほどくるくると回転する。大空においても、地球のまわりを走る円は少ないが、周転円や、その他の小さな円は数多く存在する。昇進し回転を始めた人の円についても同様なことが言える。彼等のうちで、地位から地位へと昇って、多くの恵まれた地位を経験する人は少なく、大抵の者は小さな円に落ち込んで、一步か二歩か行ったところで終わってしまうのである。しかも、昇進する前に彼等が中心にいた時よりは、不幸になっているのである。全てのものが人の不幸の手本となり、その図解となるが、私は自分のことだけを考えれば十分である。私は長いあいだ立つことができなかった。そのあげくに、立ち上がるために他の人の助けを借りなければならなかった。そして今やっと立ち上がった。しかし、前よりはもっと低いところに転げ落ちそうなのである。

## 論 議 XXI

私の神よ、私の神よ、来たるべき世を写す鏡として、此の世はどれほどの大きさをもっているのであろうか。我々は鏡から鏡へと同じ姿を写し出す技術を持っている。あなたも同様な、しかも、もっと優れた技術を持っておられる。<sup>486)</sup> 天国において我々は復活する。あなたはそれを別の鏡に写して、此の世にいる我々に見せられる。すなわち、我々は罪からの復活を持つと感じるのである。あなたは、更に、それを別の鏡に写される。すなわち、我々は此の世の不幸や災難から肉体が復活するのを見るのである。

この私の肉体の復活が、私の魂の復活を示す。此の世における両者別々の復活と、あの世における両者一体の復活の双方を示すのである。祭壇の下の殉教者たちは、<sup>437)</sup> 肉体が復活して栄光に至るようにあなたに熱心に懇願しているのであるから、あなたが始められたこの復活を完成して、私に健康を取り戻させて下さいと、私が祈りによって懇願しても許されるであろう。しかし、ああ、私の神よ、見当違いをする危険を冒してまで、私はあなたに願いごとをしようとは思わない。また、悪い結果をもたらすかも知れないものを求めるつもりもない。私は罪の床を持っている。罪を喜ぶ気持が床である。私は罪の墓を持っている。罪に対する不感症が墓である。あのラザロが四日間いたところ、<sup>438)</sup> すなわち、この腐敗のなかに、私は五十年間も居続けたのである。ラザロを呼ばれたように、大声で、何故あなたは私を呼んで下さらないのであろうか。私の魂は彼の肉体と同様に死んでいる。ああ、私の神よ、私はあなたの雷を必要としている。あなたの音楽では駄目なのである。あなたの掟に従って、我々に働きかけるあなたの僕たちを、あなたは「烈風」「戦車」「瀑布」と呼んでおられる。<sup>439)</sup> あなたが望むところでは、何処でもあなたの声は聞かれる。あなたの御子があなたと共に人間を創造した時には、静かに言葉が交わされ、話し合いが行われたのみであった。その時、ああ、祝福と栄光に溢れた三位一体よ、そこにはあなた方三人を除いて、他には誰もいなかった。あなた方は互いを容易に理解することができた。何故なら、あなた方は同じことを言ったからである。あなたの御子が救いの業を行うために此の世に来た時には、あなたは声を挙げられた。<sup>440)</sup> 今度は、それを聞いた人達は雷が鳴ったと思った。あなたの御子も、十字架の上で二度大声で叫ばれた。<sup>441)</sup> また、御子の道を整える働きをしたバプテスマのヨハネも、荒野で叫ぶ声であって、囁く声ではなかった。<sup>442)</sup> あなたの声であれば、それは何時も大きな声である。あなたは力強い声をもってこれらの言葉を告げ、それに何も加えられなかったと、あなたのモーセは言っている。<sup>443)</sup> あなたが言われることは明白であり、また、明白に、あなたのように大声で語るができる者はいない。誰もあなたのように我々の耳を縛ることのできる者はいないのである。い

と高き神は御声をあげられる。<sup>445</sup> その声は何であるか。主は天から雷鳴を轟かすのであるから、聞こえないはずはない。その声、あなたの声は、また、力強い声である。<sup>446</sup> それはその威力において力強く、人によく聞こえるだけではない。また、その強制力において力強く、人に聞かねばならぬと思わせるだけではない。それはその作用においても力強く、人々は必ずそれを聞くのである。だからこそ、あなたは一つの詩編を与えて、あなたの声について我々に考えさせている。<sup>447</sup> あなたの御子によると、あなたの声は、死んだ者も聞く時が来るのである。<sup>448</sup> 私はまさに死んでいる。それなのに、ああ、神よ、何故あなたはあの効果的な大きな声で私に語りかけて下さらないのであろうか。聖ヨハネはあなたの声を聞いたときに、声の主を見ようとして振り返った。<sup>449</sup> 時として我々は楽器に好奇心を寄せ過ぎる。すなわち、誰の口を通してあなたが語られるかに気を奪われる。しかし、我々の心に向かってあなたが語られる時に、あなたの声は最も大きく聞こえるのである。「沈黙があり、声が聞こえた」と或る人はあなたの僕であるヨブに言っている。<sup>450</sup> 私はあなたの礼拝に出て、あなたの声に耳を傾ける。しかし、秘密集会に出て、密かな囁きを聞こうとは思わない。ああ、私の神よ、今でも私はあなたの声を聞いてはいるが、あなたの声以外の何も聞こえないように、今よりも大きな声で語りかけて下さい。私の罪は大声で叫んでいる。カインの罪は大声で叫んだ。私の苦しみは大声で叫んでいる。潮は声をあげる（潮は苦しみである）。<sup>451</sup> しかし、主よ、あなたは多くの潮の声よりも、多くの世俗的な苦しみ、精神的な苦しみ、その両者の如何なるものよりも、強い声を持っておられる。それなのに、何故あなたはその声で私に語りかけて下さらないのであろうか。「人間とは何者か。その存在の意義は何か。その行う善、その行う悪とは何か」と書かれている。<sup>452</sup> 私の罪の床は必ずしも悪ではない。絶望的な悪ではない。あなたがそこから私を呼び出されるからである。私がそこから立ち上がることは、必ずしも善ではない（完全な善ではない）。あなたが私を支えて、更に大きな声で私を呼んで下さらなければ、立っておれないからである。ああ、私の神よ、「人が究め尽くしたと思ったときは、まだ始まったばかり

りである」<sup>452</sup> という聖句が、恐ろしい意味を持つことを私は恐れる。人の肉体が最早罪を犯すことができなくなった後も、罪の思い出が昔の罪を繰り返させる。我々が悔い改めのために覚えておくようにとあなたが望まれたことを、我々は享楽のために覚えているのである。サウルはダビデについて、「寝床のままわたしのもとに担ぎ込め。殺すのだ」<sup>453</sup> と言った。しかし、あなたがそう言われたのではない。それはあなたの声ではない。「家臣たちは、共謀し、ヨアシュを寝床で殺した」<sup>454</sup> と書いてある。しかし、あなたがそれを許されたのではない。私が病気の床にあったとき、私に使えている者たちが私を見捨てたり、私に愛想を尽かしたりすることをあなたは許されなかった。あなたは、「羊飼が獅子の口から二本の後足、あるいは片耳を取り戻すように、イスラエルの人々も取り戻される。今はサマリアにいて豪華な寝台や、ダマスコ風の長椅子に身を横たえていても」<sup>455</sup> と言って警告されている。危険から安全に守られている者たちでも滅ぶのである。私のように死の床にあった者が死ぬのは当然ではないか。それなのに、あなたは私にはそのような処遇をされなかった。「人々は病人を大通りに運びだし、床に寝かせた。ペテロが通りかかるとき、せめてその影だけでも病人にかかるようにした」と書いてある。<sup>456</sup> ああ、私の神よ、あなたは私を影で覆い、私の元気を回復された。しかし、何時になったらそれ以上のことをして下さるのであろうか。何時になったら全てを与えて下さるのであろうか。何時になったらあなたの大きな声で私に語りかけて下さるのであろうか。何時になったら「床を担ぎ、歩け」<sup>457</sup> と私に命令されるのであろうか。私の床は私の感情である。何時になったら私はそれを担ぎ、抑えることができるのであろうか。私の床は私の苦しみである。何時になったら私はそれを担ぎ、不平を言わなくてすむのであろうか。私はその上に寝て楽しむのでもなく、その下に倒れて罰を受けるのでもなく、何時になったら私は床を担ぎ、歩けるようになるのであろうか。しかし、ああ、私の神よ、私の神よ、あなたは肉体の神であると共に、精神の神でもある。どうか、私の衰えた肉体にあなたがなされたことを、私の弱い精神に対してもなされると考えて、すなわち、まだじっと座っているだけであ

---

るが、私の肉体がいずれは立ち上がることを学び、立ち上がることによって更に歩くことを学び、歩くことによって更に旅をすることを学ぶように、私の魂も、「立て」というあなたの声に従うことによって、益々大きなあなたの恵みを受けて前進し、遂にはあなたと私の間に何の疑いも、何の不信も存在しなくなる処に立ち、あなたにとって常に受け入れられる者、あなたから常に満足を与えられる者となって、それに相応しい声で語り、また、そのような声を聞くことができるようになる、そう考えて安心が得られるようにして下さい。

### 祈 禱 XXI

ああ、永遠の最も恵み深い神よ、あなたは小さなもので大きなものを表し、洗礼の水や聖餐のパンと葡萄酒であなたの御子の無限の真価を我々に伝えられた。あなたはこの倦怠と苦しみの床から起きる力を私に与えられただけでなく、あなたの恵みによって、この肉体の再起を、罪の許しと永遠に続く天国の栄光という、第二第三の再生の保証とされた。それ故に、私は心からあなたに感謝を捧げたいと思う。どうかこの感謝を私の捧げ物として受けて下さい。あなたの御子ご自身も、自らは常に無限であり、それ以上には何も付加できない存在でありながら、処女の胎内に宿り、衆目の中で成長し、背丈を伸ばされた。あなたの私に対する好意は、結局、あなたの私に対する神聖なる意志として決定され、完成されるということを私は知っている。そのなかにああなたの恵みはあり、そのなかで私は完全である。しかし、どうかあなたの恵みを、あなたの季節を追って、あなたが良かれと思われる程度と段階を経て、私に示して下さい。そうすれば、私はあなたが無限の善であると知る慰めを得るだけでなく、あなたが日々私にとって一層良くなって行くと感じる慰めを得ることができる。そうして、聖パウロの思い上がりを押さえるために、サタンの使いを彼の元に送られたように、<sup>458)</sup> 私の思い上がりを静めるために、私の元にああなた自身を遣わして、今日どんなに恵みを与えられていても、あなたの明日の恵みが受けら

れなければ、たちどころに私は死ぬという認識を与えて下さい。従って、「日々の糧」を与えて下さいと、私は熱心にあなたに祈る。あなたは私に何日ものあいだ悲しみのパンを与え、何日かのあいだは希望のパンを与え、遂に今日所有のパンを与えて、全能の神が注いだ力によって私が立ち上がれるようにされた。そのように、ああ、主よ、命のパンも続けて私に与えて下さい。まずあなたを信じて疑わないようになる精神的な命のパンを、次にあなたを正しく受け入れることができるようになる聖餐式の命のパンを、そして、あなたと永遠に一つになることができるような更に貴い真の命のパンを与えて下さい。ああ、主よ、あなたが天使を創造して、次に、鳥や、魚や、動物や、昆虫を創造されるのを見たとき、天使たちはあなたに、もっと良い生物を創造して下さい、もっと良い仲間を与えて下さいとせがまずに、じっとあなたの時を待ち、遂に彼等にあまり劣らない性質を持った人間を与えられたことを私は知っている。同様に、ああ、神よ、あなたの最初の恵みによって、立ち上がることができるようになった私は、直ちに私の健康を保証して下さいとあなたに乞うようなことはしない。また、あなたの恵みによって、あなたの罰が私に薬として作用したのを見て、私に与えられた精神的な力を自慢するようなことはしない。私の肉体的な力があらゆる風の一吹きにも左右されるように、私の精神的な力もあらゆる虚栄の突風に左右されることを私は認めているのである。そうであるから、ああ、私の恵み深い神よ、どうか、肉体的にも、精神的にも、私に十分な力を与えて、私が絶えずあなたから受けたものに感謝できるように、また、絶えずあなたに祈願し、あなたの手から私が求めるものがあるようにして下さい。

## XXII 病気の火種に注意せよ

私の病気の根源と原因、その熱をもたらした炭、石炭、燃料を調べ、  
医者はそれを除去し、正そうとする

人間は肉体を手に入れた時、何と荒廃した農場を所有することになったのであろうか。家は崩れ落ちようとして日々傾き、土地には雑草が一面にはびこっている。肉体には病気が蔓延しているのである。この農場では全ての土塊や小石が雑草を育てる。我々の肉体では、全ての筋肉や骨が病気を持っているのである。この農場の表面にある石は、残らず毒草を育てる。我々の顔にある歯が残らず激しい痛みを与えるのである。我慢強い人でもその痛みを恐れるが、それを恐れること、すなわち、痛みを感じることを、恥ずかしいと思うのである。彼の農場に対して、人間は何と高価な地代を、何と度々支払っているのであろうか。彼は一日に二度、二回分の食事を地代として支払っているのである。しかも、その地代を稼ぐ時間は極めて少ない。まことに多くの休日があって、仕事を休むようになっている。また、全ての日は半日である。半日は寝て暮らすからである。地代のほかに、補償金、上納金、寄付金などを支払わなくてはならない。すなわち、食事の他に多くの薬を飲まなくてはならないのである。また、自分の家族以外にも、居候を引き受けなくてはならない。すなわち、他人から病気をもらわなくてはならないのである。アダムは楽園の手入れをして、保存を計らねばならなかったが、額に汗して働かなければならないほどの地代を払う必要はなかった。それなのに彼は楽園を捨てた。それに比べると、我々は何と大きな地代を、我々の農場、すなわち、我々の肉体のために支払っているのであろうか。すなわち、我々自身を、農場そのものを、地代として支払っているのに、我々は農場の収穫に頼って生きることができないのである。その上、雑草が芽吹いたとき、直ちにそれを抜いても、すなわち、急激に死を招くような病気の激しく危険な症状を抑えても、また、雑草を根こそぎ抜いて、一つの病気を根治したとしても、我々の農場の土地全体が悪性を持っており、土壌そのものの質が悪いのである。すなわち、我々の肉体は病気にかかる傾向、素質を持っているのである。それ故に、他に疾患がなくても、病気は発生するのである。我々の農場を管理するために、

我々は絶えず労働を強いられる。すなわち、絶えず我々の肉体における体液の配合、組成を観察しなくてはならないのである。酸性、乾燥、湿気、あらゆる種類の不毛、そのような土壌の不調や疾患の場合には、大抵土壌そのものからその病気を直す薬が得られるものである。時には立地条件が病気を直してくれる。例えば、岡の斜面の立木は、その悪性の湿気を除去し、吐き出すものである。また、表土を焼くことは（灸による治療のように）土壌に新しい活力に溢れた若さを取り戻してくれる。また、灰からは一種のフェニックスが飛び立つ。すなわち、以前不毛だった土地から豊かな実りが生まれるのであるが、これは最も不毛なもの、灰の力によるのである。そして、土地が自ら治療薬を提供できない時でも、他の土地、他の土壌から治療薬を借りて来ることができる。しかも、治療薬を提供した土地は、そうしても一向に悪くはならないのである。例えば、岡から粘土を借りたり、海岸から泥土を借りの場合がそうである。土地は自らを助けるが、助けを借りた他の土地を侵すことはないのである。しかるに、何と厳しい地代を払い、苦しい契約を結んで、私は土地を手に入れたのであろうか。私の土地は自らを救う力がないのである（私の体の一部を切り取っても、それで他の部分が治癒することはない。場合によっては、そうすることによって、他の健康な部分が救われることはあるが、病気に侵された部分が健康を回復することはない）。また、私の体が他の人の体から薬を得るようなことがあっても、すなわち、他人の肉体を薬とすることがあっても（例えば、ミイラや、その他の場合である）、それは既に死んだ人の体から取ったものでなくてはならない。私の土地に、生きた土壌が粘土や泥土を提供すれば、自分が少しも被害を受けないというわけにはいかない。一人の人間のなかに、自分を救うものはない。人類全体のなかにも、（この種の、薬となるものの場合）相互の救いになるものはない。薬を提供する人は、薬をもらう人が薬をもらわなかった場合そうなるように、非常に悪い状態に置かれるのである。すなわち、薬を提供する人は、まず死ななくてはならないのである。従って、私が私の肉体という農場を手に入れたとき、沢と言うより、沼を排水することを引き受けたのである。沼におい



---

ては、水と土が混ざっているのではなく、全てが水なのである。また、私は糞尿の悪臭を香水に変えることを引き受けたのである。糞尿は部分的にでなく、全体が悪臭を放つのである。或る明白な特質において、例えば、極端に暑いとか、冷たいとかいった点で、毒であるものではなく、全ての点で、すなわち、その全体の素材においても、その独特の形態においても、毒であるものを、健康なものに変えることを引き受けたのである。病気の激しい症状を直すことは、偉大な仕事である。病気そのものを直すことは、もっと偉大な仕事である。しかし、病気の根源であり、原因である身体そのものを直すことができるのは、あの偉大な救い主だけである。来たるべき世において、まさに我々の身体を清めることによって、彼はそれを達成するのである。

## 論 議 XXII

私の神よ、私の神よ、私の病気の根源、燃料、原因を考慮し、それらを取り除けと言われるのであれば、それは何と難しい事であろうか。如何なるヒポクラテス、如何なるガレノスでも、私の体中でそれを指摘することはできないであろう。それは体よりももっと深いところに存在する。すなわち、私の魂の中に存在する。いや、それよりも深いところに存在する。何故ならば、魂が到来する前、生命が吹き込まれる前の肉体は、罪を持たなかったはずであり、肉体のところに到来し汚染される前の魂は、罪をもたなかったはずだからである。罪があらゆる病気の根源であり、燃料である。しかし、肉体と魂の双方を破壊するものは、そのいずれかに存在するのではなく、その両方に存在するのである。それは肉体と魂の結合により生じたものであるが、それを妨げたり、解消したりすることが私にできるだろうか。私の病気の根源、燃料は、私の罪、すなわち、私が犯した罪にある。しかし、その罪には更にほかの根源と燃料が存在する。それは原罪である。しかし、原罪を脱ぎ捨てることが私にできるだろうか。粉の塊の中に混ざったパン種を取り出せ、海の水に解けた塩を分離せよと、あなた

は私に命じられるのだろうか。私の罪の燃料、燃えさしを見張って、二度と私に火がつかないようにすることを期待しておられるのだろうか。此の世全体が薪の山であり、我々はその上に置かれている。しかも、我々は（他には類のないような）ふいごなのである。無知が火を煽るからである。「汚れたものに気付かずに触れるならば、その人は汚れ、責めを負う」<sup>469</sup>（従って、罪とみなされる）。たとえ知らずに、「誤ってなされた」<sup>469</sup> 場合においてもである。無知は石炭を煽る。しかし、知識はもっと煽る。何故なら、「死に値するという神の定めを知っていながら、自分でそれを行うだけではなく、他人の同じ行為をも是認」<sup>469</sup> する者がいるからである。自然も石炭を煽る。我々は「生まれながら神の怒りを受けるべきもの」<sup>469</sup> である。また、法も石炭を煽る。あなたの使徒である聖パウロは、「罪は掟によって機会を得る」<sup>469</sup> ことを発見した。法が禁じているから、我々が行うようなことがある。法を犯せば、それは罪になる。「罪を犯す者は皆、法に背く」<sup>469</sup> のである。その結果、「五体の内にある罪の法則」<sup>469</sup> が生まれる。祖先が我々のなかに罪の種を蒔き、罪の泉を置いたのである。まさに「泉の水が湧くように」<sup>469</sup> 我々の罪は湧き出るのであり、我々は「祖先よりも悪い者」<sup>469</sup> となったのである。我々は数え切れない誘惑に晒されているが、それではまだ不足であるかのように、「自分自身の欲望に引かれ」<sup>469</sup> るのである。しかも、それでも満足せず、まるで我々が自分自身を破壊し、爆破するに十分な力と知恵をもっていないかのように、罪を犯すことが自分にとって楽しくない時でも、他人のために罪を犯すのである。アダムがエバのために、<sup>469</sup> ソロモンがその妻たちを満足させるために、罪を犯したとき、<sup>470</sup> それは女に溺れた故の罪であった。長老たちがイゼベルのために罪を犯し、<sup>471</sup> ヨアブがダビデの言うことを聞いたとき、<sup>472</sup> それは野望の故の罪であった。ピラトが人々の要求をいれるために罪を犯し、<sup>473</sup> ヘロデがユダヤ人に喜ばれようとしたとき、<sup>474</sup> それは民衆に迎合した故の罪であった。何事でもあらゆる事が罪を生む原因となる。内を見れば私の胸の中においても、外を見れば私の目標・目的においても罪がある。私であるところのもの、私になりえないところのもの、私がそうありたいと願うところの

もの、それら全てが罪の石炭であり、燃えさしであり、燃料であり、ふいごである。それなのに、ああ、私の神よ、私が健康になるためには、進んで私自身を捨てなくてはならないと、あなたは要求されるのであろうか。「古い人を脱ぎ捨てよ」<sup>475)</sup>とあなたが言われるとき、あなたは私が実際に犯した罪を捨てるだけでなく、原罪という最も古い衣も捨てるように言っておられるのであろうか。「古いパン種をきれいに取り除きなさい」<sup>476)</sup>とあなたが言われるとき、私の悪癖の悪臭だけでなく、自然によって植えつけられた罪の内在的な色素まで取り除けと言っておられるのであろうか。どうしたらそのあなたの要求を充たし、なおかつ、罪は全てに及んだと言われたあなたの御言葉を否定せずにするのであろうか。しかし、私の神よ、私はあなたの注釈を無視したままあなたの聖句を借用して、無理な要求をあなたに押しつけようとは思わない。私の魂よりもはっきりと見える私の肉体的状態において、あなたが私の魂の姿を彫像されようとしておられることを私は知っている。如何なる解剖学者も、肉体を切開して、ここに全ての肉体的疾患の石炭、燃料、原因があると指摘することはできないけれども、人は自分の体質や肉体的性癖が病気にかかり易いことを知って、大方はその危険を事前に避けることはできるのである。同様に、我々が実際に犯す一つ一つの罪ほどには、我々の原罪がどこに宿っているのか、その性質が如何なるものか、我々は正確に指摘できないし、また、どんなに懸命な努力をしても、それを捨てることはできないけれども、それはあなたの洗礼の水に洗われて、我々が直視したり、認識できるほどに清められており、また、以前の性質はまだもっているが、以前のような力はなく、以前のような名前ももっているが、以前のような毒はもっていないと言えるほどに、弱められているのである。

## 祈 禱 XXII

ああ、永遠の最も恵み深い神よ、あなたは安全の神ではあるが、また、安全の敵でもある。あなたは我々があなたの愛に安全を見出すことを望ま

れるが、同時に、そのためには我々が常に何か行動するように求められる。どうかあなたが私とともに在ることを私が悟ることができるように、しかし、あなたをまだ捕まえていないかの如く私があなたの後を追いかけるようにして下さい。あなたはヒゼキヤの命を十五年延ばされた。<sup>477</sup> また、ラザロの命も延ばされたが、それが何年であったかは明らかでない。<sup>478</sup> しかし、いずれの場合にも、あなたは病の火を完全に消してしまうようなことはされずに、燃えさしを掻き集めて、あなたが執行猶予とされた肉体のなかに未来の死の種を包まれたのである。ああ、慈愛深いけれども恐ろしい神よ、あなたは我々の魂に対しても同じようにされる。あなたは罪人が二度と罪を犯さないようになるほどには、彼の罪を許されることはないのである。あなたは誰かが完全無疵となるほどには、その人を意に適なうものとされることはないのである。それ故に、私が悔い改めてキリストの傷のなかに葬り去った私の罪を再び疑惑と疑念の目で振り返り、既にキリストに預けたはずであるのに、未だにそれらが私の罪であると考えたり、命の泉であるキリストのなかで既に死んでいるはずなのに、それらの罪が廻って私を死に陥れることがあると思ったりするのは、あなたの恵みの大きさを過小評価し、その満ち足りた豊かさを損なうことになるが、逆に、あなたの今の恵みが私の全ての未来の罪にも及ぶものと考えたり、未来において私に罪を犯させるような燃えさし、石炭が私の心に残っていないと思うのは、常軌を逸した期待であって傲慢な思い上がりになるのである。ああ、私の神よ、どうか私の魂に対するあなたの恵みをほどよいものにして下さい。私がいま与えられたあなたの恵みが、あなたとの完全な和解を許された人々に与えられた恵みに比べて、より暖かみの少ない、より真心に欠けるものであると思い込んで、私が意気消沈することがないようにするとともに、私がいま与えられた恵みは全ての悪を制する解毒剤であると勝手に考えて誘惑に身を任せ、あなたの恵みが私を守って下さるから大丈夫だと確信したり、この度の恵みがいとたやすく与えられたように、私が新しい罪を犯しても必ず新しい恵みが容易に与えられると思ひ込んだりすることがないようにして下さい。

---

## XXIII ぶり返しを恐れる

再発の恐ろしい危険について、医者は私に警告する

### 黙 想 XXIII

夜の鐘が鳴り、火を消して燃えさしを掻き集めれば、都市ならばそれで身を横たえて、ぐっすりと眠れるのであるが、人の肉体ではそうは行かない。薬と食事療法によって、病気の燃えさしを掻き集めても、再発の恐れがあり、その方が危険なのである。楽しみや苦痛においても所有権がある。すなわち、あなたのもの、私のもの、という区別が存在するのである。人は以前に経験し、享受することによって自分のものとなった楽しみに最も強く感動し、以前にひどく苦しめられ、悲しい思いをすることによって自分のものとなった苦痛に最も激しく慄くのである。がめつく蓄積する快楽で自分の感覚を麻痺させ、心を満たした貪欲な者は、大らかさ、寛大さに楽しみを見出す人がいることを不思議に思うのである。同様に、肉体的苦痛の場合にも、結石の発作を経験した者は、痛風の痛みを苦にする人があつたのを不思議に思い、また、そのいずれも知らずに歯痛を経験したことのある者は、いずれかに苦しんだ者がそのいずれかを恐れるほどに、歯痛を恐れるものである。我々が経験したことのない病気は、それを経験した人への同情として感じるしかない。しかし、我々が気の毒に思い、不憫と思う苦しみをある程度まで我々自身で感じたことがなければ、同情すらあまり感じることはできまい。それに対して、我々自身が最もひどい苦しみを味わった場合には、我々は再発を恐れて、震えるのである。我々が高熱に喘ぎつつ旅をしなければならぬとき、溢れ出る汗の海を航海しなければならぬとき、長い夜に幾夜も寝ずの番をしなければならぬとき、長い昼間に幾日も悲しまなければならぬとき（そのような時には、昼も夜も

あまりに長いので、自然が発狂して、一番長い昼と一番長い夜を、本当は六ヶ月離れているべきであるのに、自然の不自然な一日に置いたようだが)、また、我々が以前と同じ法廷に引き出されて、医者たちが評議を終えて帰るのを待ってはいるが、果たして良い兆候が現れて以前と同じような診断が降りるかどうか確信できないとき、我々が以前と同じ道を再び歩まねばならないのに、同じ結末に到達するかどうか分らないとき、このような時こそ、他のどんな病気でも快方に向かっているように見え、もっとひどい病気ですらその方が軽く見える、そんな時である。再発というものは我々の体の不調に起因するものであるから、我々自身が(多くの場合そうなるのも当然だと思われるのだが)自ら招くものである。従って、受動的にだけではなく、能動的にも、我々是我々の破滅を招いているのである。我々は倒れる家の下に立っているだけでなく、その家を引きずり倒しているのである。我々は死刑を執行されるだけでなく(それは我々の有罪を意味する)、死刑を執行するのであり(それは我々の不名誉を意味する)、自分で自分を処刑するのである(それは我々の不信を意味する)。かくして我々は最初の病気の時に持ち得る慰めから脱落してしまう。すなわち、人間は全て哀れな存在であって、病気に罹らない者はないと考えて得られる慰め(そう考えることは、万人と同じ状態にあると考えることであるから、ある程度の慰めになる)から脱落する。すなわち、自ら不調を起こして病気の再発を招き、元の状態に逆戻りすることによって、長い間の努力を瞬時に破壊し、折角与えられた恵みを台無しにするとは、神とその僕に対して何と不遜な、何と恩知らずなことであろうかと考えて自ら不幸を招き、自分を責め、自分を呪うことになるのである。そこで、恐ろしいことに、私の黙想は肉体から精神の方に移る。すなわち、病気の反省から離れて、再発をもたらした私の罪、罪深い不注意の方に移るのである。再発を深刻にするものの一つに、再発は元の病気よりも急激に襲い、取り返しがつかないものであるということがある。何故なら、再発に襲われるときに、国はすでに荒廃して人が住まなくなっているからである。姿を現したことのない病気に対して、我々は明確な恐怖を持つことはできない。何を恐れてよ

いか分からないからである。しかし、恐怖は最も忙しく最もやっかいな感情である。しかも、過ぎたばかりの状態に逆戻りする再発は（それは何時起こるか分からない）、その恐怖という感情の最も身近な対象、最も直接的な活動の場なのである。

## 議 論 XXIII

私の神よ、私の神よ、私の神よ、私の医者になられた偉大なる父よ、私の薬となられた栄光に溢れる御子よ、私のために全てを用意し、実行して下さった祝福に溢れた聖霊よ、たったひとりでこの私があなた方の御業を転覆させ、あなた方の限りない恵みによって私が救われたはずの精神的な病気を、再発させるようなことができるのであろうか。ああ、私の神よ、あなたは確かに私に十分な恵みを与えられたが、それはあなたの多くの民、一つの国民、栄光に満ちた数多いユダヤの民に与えられた恵みほどには大きなものではなかった。それなのに、彼等は何と度々病気の再発に落ちたことか。そうであれば、私が再発しないという保証が何処にあるのだろうか。あなたは彼等が犯した他の多くの罪はいとも簡単に見逃されたが、彼等が何度も再発した罪には厳しくこたわられた。その罪とは、あなたの道具、あなたの僕であるべき者が、あなたに対して不平を言い、他の神に救いを求め、彼等の周りに住む者たちの偶像を崇拜したことであった。<sup>479)</sup> ああ、私の神よ、不平を言うことは、何と滑り込み易く、何と深い奈落に我々を落す道であろうか。また、あなたから使わされた者に対して不平を言うことは、何とあなたを傷つけることに近いことであろうか。国を治める為政者は、あなたが身にまとった衣である。衣に向けて弾を撃つ者は、それを着ている人に危害を加える意図がなかったとは言えないであろう。あなたの選ばれた民が、しばしばその恐ろしい例である。何故なら、何度も彼等はあなたの僕たちに不平を言って、その結果あなたから離れて行ったからである。彼等が他の指導者を求めたとき、彼等は他の神を求めたのである。何時でも、今日の不平は明日の偶像崇拜であった。彼等の不平が偶像

崇拜を招き、その両方を彼等が何度も再発したように、私にもそのような罪の転移があり、再発を恐れなければならないことを、ああ、私の神よ、（ああ、私の神よ、それを見出したのはあなたであり、そのお陰で）私もまた、私のなかに見出した。罪の魂は、（我々は罪を不滅にしたから、罪には魂があるはずだ）、罪の魂は、あなたに従わないことである。そして、私のなかで一つの罪が死ぬと、その魂は別の罪に転移するのである。我々の青春が死ぬと、我々の青春の罪も死ぬ。ある罪は不慮の死を遂げ、ある罪は自然に死んで行く。貧乏、貧困、入獄、追放などによって死ぬ罪もあるが、老齢によって死ぬものもある。色々な原因によって我々はある罪を犯せなくなるのであるが、罪の魂はまた別の罪に転移してしまうのである。放蕩に耽った者が、野望をもつようになり、更に、信仰を失って霊的不感症に陥る。我々の罪にも三つの時代がある。青春の罪が死ねば、中年の罪が生まれ、その後には、老齢の罪が続く。このように罪は私のなかで転移して行くので、ああ、私の神よ、私は再発を恐れたいわけにはいかない。いや、既に再発して何度も繰り返しているのであるから、私が憂慮しなければならない理由はもっと重大なのである。ああ、私の神よ、何故再発はあなたにとってそのように憎むべきものなのであろうか。あなたに従わなかった民の場合にも、彼等が不平を言って偶像崇拜を実行したことよりも、それらの罪を繰り返したことが、あなたを怒らせたようである。「イスラエルの聖なる方を傷つけた」とあなたは嘆いておられる。<sup>460</sup> その原因は彼等の不平であったが、その罪で彼等を非難される前に、同じ所で、彼等の罪を明らかにする前から、彼等が罪を繰り返し、反復したことを非難して、「どれほど彼らは荒野で神に反抗し、砂漠で御心を痛めたことか」と言っておられるのである。あなたが彼等に絶望し、あなたの契約を破ってでも罰を与える方が良い（「わたしが彼らの祖先に誓った土地を見ることはない」<sup>461</sup>）と考えられるようになった理由は、彼等があなたを「十度も（すなわち何度も）試み」たからである。この点については、あなたは激しい言葉を用いて、「もしあなたたちが再び背いて離れるなら、あなたたちの神、主がもはや、これらの国民を追い払われなことを覚悟しなさい。彼



らはあなたたちの畏となり、落とし穴となり、脇腹を打つ鞭、目に突き刺さるとげとなり、あなたたちは滅びうせる」<sup>482</sup>と脅しておられるのである。ああ、私の神よ、あなたの舌の他に、偶像崇拜を再発した国民に対するあなたの怒りを表現できるものはない。如何なる国民に於ても、偶像崇拜は恐るべきことである。しかし、その病気が再発したとあれば、(既に回復を自覚し、認めたのであるから)、それは死をもたらすものとなる。そのような時には、あなたの怒りは、確かな証拠がある場合にのみ例外なく働くだけでなく(と言うのも、あなたは、誰かが「その町の住民を迷わせているということを知れば、それを尋ね、それが確かな事実であるなら、その町も、その町の住民も、家畜も滅ぼし尽くす」<sup>483</sup>とっておられるから)、偶像崇拜の再発の疑いや噂しかない時でも、あなたの怒りは目覚め、人々はあなたの逆鱗に触れるのである。あなたの僕であるヨシユアの時代に、「ルベンとガドの人々、およびマナセの半部族が一つの新しい祭壇を築いたとの知らせ」があった。<sup>484</sup> それを聞いたイスラエルの人々は、使者一人を送るのではなく、「共同体全体の集まりを開き、彼らに対して軍を差し向けることにした」<sup>485</sup>のである。その結果、「それぞれ家系の指導者一名」<sup>486</sup>が出かけていった。そのとき彼等が問題にしたのは、現在偶像崇拜への傾斜があるということよりは、以前の罪の再発ではないかということであった。「かってペオルで犯したあの罪は、我々にとってささいなことであっただろうか」と彼等は言っている。<sup>487</sup> それは以前に行われた偶像崇拜のことであり、その罰として死んだ罪人は二万四千人に上ったのである。<sup>488</sup> ルベンとガドはそれに答えて、祭壇は偶像崇拜のためではなく、「主の祭壇の模型」として建てられ、イスラエルの信仰と同じ信仰を持っていることを示すものであると言った。<sup>489</sup> そこで、軍隊は血を流すことなく帰ったのである。あなたは我々の心の底まで見抜かれるのであるから、あなたの民であるイスラエルの人々が病気を再発したのではないかという噂が発生しても、悪意がない時には、未然に危険の芽を摘まれたのであるが、それでも、実際に偶像崇拜を再発するほどでない場合ですら、ああ、私の神よ、あなたはそれを敏感に察知される。それほどあなたにとって再

発は忌むべきものであり、罪の重さを倍加するものなのである。しかし、ああ、私の神よ、なぜ再発はそのようなものであるのか、それほど忌むべきものであるのか。そのわけは罪を犯して悔い改めた者は、神と悪魔を秤にかけて測ったことになるからである。彼は神と悪魔の双方の主張に耳を傾け、聴取した後に、判決を下し、以後は彼がついた側の定めに従って生きるのである。もし、彼が元の罪に戻るのであれば、彼は悪魔の側についてことになる。<sup>490</sup> 恵みよりも罪を、神よりも悪魔を選んだことになる。神を軽蔑して、神の敵の優位を宣言したことになるのである。軽蔑は非難よりも深い傷を負わせるものである。再発は冒瀆よりも深手を与える。あなたは罪の再発があなたにとって忌むべきものであることを、既に明らかにされているのであるから、何故それがこの私にとって危険なものであるのか、致命的なものであるのか、改めて尋ねる必要はないであろう。あなたの怒りの大きさ以外に、私の危険の大きさを測る尺度はないのである。もし、私が再発するようなことがあれば私がどうなるかを、あなたは海の嵐の喩えを用いて、適切に、かつ、恐ろしく、描いておられる（「彼らは天に上り、深淵に下った」<sup>491</sup>）。私の病気は悔い改めによって私をあなたの処に連れていったが、私の再発は今までよりもあなたから遠い処に私を追いやる。「そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる」とあなたの御言葉、あなたの御子は言うておられる。<sup>492</sup> 私の初めの状態は病気であり、それは罪に対する罰であった。しかし、私が再び罪を犯せば、「もっと悪いことが起こるかもしれない」と御子は言うておられる。<sup>493</sup> 死は終わりであって、初めであった病気より悪いが、その死よりもっと悪い初めである地獄を与えられるのである。あなたの偉大な使徒は一度あなたの御子を拒み、また再び彼を拒んだが、<sup>494</sup> それはいずれも彼が悔い改める前のことであつたから、再発ではなかつた。ああ、もしあなたがアダムを再び楽園に返されたならば、彼はあの木の側を歩いても断じて手を出すようなことは憤むであろう。あの墮落した天使たちも、もし再びあなたの御前に立つことを許されたならば、二度とあなたから離れることはしないであろう。彼等も再発をした訳ではないのである。もしも、私が再発するようなことが

あれば、彼等のように絶体絶命というべきであろうか。いや、そうではないのである。何故ならば、「主の憐れみは、その尊厳と同じく」、<sup>485)</sup> ともに限らないからである。あなたは私の兄弟を七の七十倍も赦すように命じられたが、<sup>486)</sup> あなた自身については数を限られなかった。もし、死そのものが悪いのであれば、あなたは死人を甦らせるようなことはなされなかったであろう。その人は必然的に再び死ななくてはならないからである。もし、赦しを与えるに当って、あなたの恵みが、再発は大変悪いもので、再発したらもはや赦さないと決めつけられたならば、我々は前に赦された分だけ不幸になることになる。此の世にいる限り、罪の必然性の下に置かれていないものはない。ただし、罪の必然性は我々の弱さにあるのであって、あなたの定められたものではない。私がこのようなことを言うのも、ああ、私の神よ、私が再発を予測し、厚かましくその準備をするためではない。そうではなくて、私の弱さから再発を招いても、私が絶望に取りつかれないように、そのあらゆる道を塞いでおくためなのである。

### 祈 禱 XXIII

ああ、永遠の最も恵み深い神よ、あなたは常に限らない存在であるが、我々の祈りの数に応じてあなたを更に大きくされる。また、あなたの栄光と、あなたの偉大さを増進されるために、我々の願いを聞き届けられる。今までも常に私のしてきたことだが、今また、ああ、私の神よ、二つの祈り、二つの願いをもって、威厳に溢れるあなたの前に私は進み出る。あなたがどれほど熱心にあなたの名誉を重んじられるかについて、私は深く瞑想してきた。そして、最もあなたの名誉を傷つけ、最もあなたを軽蔑することに近いものは、あなたの赦しを求め、しかも、あなたとの和解の印璽を受けた後に、私があるに赦しを求め、かつ、あなたに赦された昔の罪に立ち返ることではないかと覚った。そうすることは、あなたの掟、あなたの言葉、あなたの秘跡、あなたの印璽、あなたの恵みを、私の霊的姦淫の道具とすることに大変近いのではないかと思う。従って、私はあなたの

矯正を受けることによって、あなたの一部に与ることを認められ、（しかし、ああ、私の神よ、あなたは分割されることはない）、あなたの全てを所有することを許されて、今この瞬間にあなたが私の解体を承諾されるのであれば、今この瞬間に私をあなたに委ねる覚悟ができていますのであるから、ああ、私の神よ、永遠に変わらず永遠に耐え忍ばれる神よ、あなたの裁きを受けることになった昔の罪を、今のこの状態において再発することがないように私を守って下さい。しかし、私は大いに悲しむべき経験によって、私の罪深い習性が私の罪の道を滑り易いものにしてしまったのを知っているので、私はもう一つの厚かましい願いを付け加えたいと思うのである。すなわち、もし、私が己の弱さに負けるようなことがあれば、どうか私を見捨てないで下さい。<sup>497</sup> 私の魂に向かって、「子よ、お前は罪を犯した。二度と繰り返すな」と言って下さい。<sup>498</sup> そして、たとえ再び罪を犯しても、あなたの悔恨と自責の霊が、私から離れることはないと言言して下さい。あなたの神聖なる使徒である聖パウロは三度難破したが、その度に救われた。<sup>499</sup> 此の世の暗礁、砂州、絶壁、浅瀬、順境、逆境が、それぞれ異なったやり方で私を待伏せており、私自身の水漏れが私を危険に晒しているのではあるが、ああ、神よ、どうか私がヒメナイと共に船に乗ることがないように、また、信仰と良心の難破をまねくことがないようにして下さい。<sup>500</sup> そうすれば、私が最も熱心に来ないように祈っていること、すなわち、私が心から後悔し、あなたが完全に赦して下さった私の昔の罪を再発するようなことが起きても、長く生き続けた、また、永遠に生き続ける、あなたの恵みが、私を訪ねて下さるに違いありません。

[注]

主に原書の側注をもとに、聖書の出典を示す。側注でないものには(\*)印を付す。聖書は「新共同訳」を用い、詩編については側注と番号が異なる場合は括弧で示す。

- |  |                       |
|--|-----------------------|
| 423. アウグスティヌス：「結婚の利益について」への言及                          | 440. ヨハ 12：28 (28～29) |
| 424. コヘ 11：4   | 441. マタ 27：46, 50     |
| 425. 箴 10：4  | 442. マタ 3：3 (*)       |
| 426. 詩 24：3～4  | 443. 申 5：22           |
| 427. 出 32：29 欽定訳と共同訳ではかなりの相違がある。共同訳は「主の司祭職に任命され」である。   | 444. サム下 22：14        |
| 428. サム上 22：17 欽定訳と共同訳ではかなりの相違がある。共同訳は「彼らもダビデに味方し」である。 | 445. 詩 68：33 (34)     |
| 429. レビ 8：36 共同訳は「モーセを通して」である。                         | 446. 詩 29             |
| 430. ガレノス (129頃～200頃) の「ヒポクラテス：体液論」への言及                | 447. ヨハ 5：25          |
| 431. ガレノスの「単一の薬の効果について」への言及                            | 448. 黙 1：12           |
| 432. ガレノスの「薬の組成について」への言及                               | 449. ヨブ 4：16          |
| 433. 詩 116：13  | 450. 詩 93：3～4,        |
| 434. マコ 15：23  | 451. シラ 18：8          |
| 435. 創 2：18 (*)  | 452. シラ 18：7          |
| 436. 1コリ 13：12,  | 453. サム上 19：15        |
| 2コリ：3：18 (*)   | 454. 代下 24：25         |
| 437. 黙 6：9 (*)   | 455. アモ 3：12          |
| 438. ヨハ 11：43 (17～44)                                  | 456. 使 5：15           |
| 439. エレ 4：11, 30：23,                                   | 457. マタ 9：5～6         |
| エゼ 1：4, エレ 4：13,                                       | 458. 2コリ 12：7 (*)     |
| ゼカ 6：1, イザ 49：10,                                      | 459. レビ 5：2           |
| 黙 22：1 (*)   | 460. 民 15：24          |
|  | 461. ロマ 1：32          |
|  | 462. エフェ 2：3          |
|  | 463. ロマ 7：8 (*)       |
|  | 464. 1ヨハ 3：4          |
|  | 465. ロマ 7：23          |
|  | 466. エレ 6：7           |
|  | 467. エレ 7：26          |
|  | 468. ヤコ 1：14          |
|  | 469. 創 3：9            |
|  | 470. 王上 11：3          |
|  | 471. 王上 21：11         |
|  | 472. サム下 11：16～21     |

- |  |  |
|--|--|
| 473. ルカ 23:23 (24)                       | 488. 民 25:9                                  |
| 474. 使 12:3                              | 489. ヨシュ 22:28 (*)                           |
| 475. エフェ 4:22                            | 490. テルトゥリアヌス (160頃～<br>225頃)の「改悛論」からの<br>引用 |
| 476. 1コリ 5:7                             | 491. 詩 107:26                                |
| 477. イザ 38:5 (*)                         | 492. マタ 12:45                                |
| 478. ヨハ 11:43 (*)                        | 493. ヨハ 5:14                                 |
| 479. 出 16:2, 7, 民 14:<br>27, エゼ 20:8 (*) | 494. マコ 14:70                                |
| 480. 詩 78:41                             | 495. シラ 2:18                                 |
| 481. 民 14:22～23                          | 496. マタ 18:22 (*)                            |
| 482. ヨシュ 23:12                           | 497. 詩 38:22 (*)                             |
| 483. 申 13:12-15 (16)                     | 498. シラ 21:1                                 |
| 484. ヨシュ 22:11                           | 499. 2コリ 11:25                               |
| 485. ヨシュ 22:12                           | 500. 1テモ 1:19 (19～20)                        |
| 486. ヨシュ 22:14 (*)                       |  |
| 487. ヨシュ 22:17 (*)                       |  |